

『冬の贈りもの』

桑原 紀子

1月2月は、寒く乾燥した日が続きました。1ヶ月以上、雨も降りません。木も草も凍えているような庭の中で、カエデの木（イロハモミジ）の枝から、次から次に雫が滴り落ちてきます。午前中は、朝日を浴びて、枝のあちこちの雫がキラキラと光っています。

ひとつ落ちると、すぐ次ぎの雫が内部から溢れてくるのです。1月初旬に、植木屋さんが剪定してから、毎日です。

その雫を、小鳥たちが飲みに来るようになりました。

カエデは道路に枝を広げているので、通る時、下の道路がいつも濡れているのと、鳥の糞で汚れているのを不思議に思っていました。

ある朝、玄関を開けたら、カエデにヒヨドリがいました。その内、メジロがやってきて、くちばしで雫を飲むでは、次ぎの枝に移ります。ドアに隠れてそっと見ていたら、ヒヨドリもメジロも、美味しそうにチョンチョンと、雫を飲んでいました。

ある日、生協の配達のお兄さんが来たので、玄関のドアを開けっ放しにしていました。エナガやシジュウカラの群がにぎやかに鳴きながら、カエデにやってきました。小鳥たちは、羽ばたいたり、枝にクルリと逆さまに掴まったり、いろいろなポーズで、てんでに雫を飲んで

では、嬉々としています。

お兄さんとふたり、しばらくその光景に見とれてしまいました。朝日を浴びて、雫はキラキラ、小鳥たちも輝いて見えます。

そんなに美味しいのかなあ・・・と、鳥たちがいなくなった後、溢れてきた雫を手にとって舐めてみました。うっすらと甘いのです。

メープルシロップ!と、思いました。

こんなに乾燥しているのに、カエデの根は一生懸命地下水を吸い上げて、樹液は幹を上り、枝々の切り口から、甘い雫となって滴っていたのです。思いがけない冬の贈りもの。小鳥たちは、そう思った事でしょう。

